

憲法 I (人権)

担当：柳瀬 昇

○2020年度の特例について

2020年度は、新型コロナウイルス感染症の予防のため、教室において講義を行うことに代えて、オンラインでの講義とする。Zoomを利用したライブ形式で行う（オンデマンド形式ではない）ので、毎週、月曜日4時限と金曜日1時限にZoomで講義を受講できる環境を整えてもらいたい。

今年度は、レジュメを印刷して配布することができないので、各自、事前に、下記のウェブサイトまたはGoogle Classroomからダウンロードして、各回の講義に臨みたい。また、事前に示した事前学修課題（各回の講義で扱う判例について、事実の概要及び判旨を読むこと、など）に取り組むとともに、受講後に（1週間以内に）、Google Classroom上で示した課題（近年の各種の国家試験等でその回の講義内容に関連する短答式問題を解くこと、など）に取り組む。

○教科書について

この講義を受講するにあたって、六法（小型の学習用のものであれば、出版社は問わない）と判例集（長谷部恭男ほか編『憲法判例百選I〔第7版〕』・『憲法判例百選II〔第7版〕』（有斐閣、2019年））が必要である。判例集は、Iだけでなく、I・II両方が必要となる。

○レジュメについて

この講義では、毎回、レジュメを用意するが、レジュメはあくまで講義の補助資料にすぎない。各回の講義で何を取り扱うのかをおよそ示す趣旨で配布するものであり、できる限り簡潔な内容とするようにしている。したがって、これをダウンロードすれば講義に出なくてよいなどという趣旨のものではない。

電子データを下記のウェブサーバ上にアップロードしておく。

<http://yanasenoboru.net/course/>

○スライドについて

この講義では、プレゼンテーションソフトを利用して文字や画像等を投影することがあるが、これは、あくまで講義の際に板書の代わりに補助的に用いているにすぎないので、これを印刷し、または電子データとして配布する予定はない。

スライドの内容をノートに書き写しても、勉強したことにはなりません。

○おすすめの学習方法

ここは大学であるから、教員がいちいち講義の受講の仕方を説明する必要はない（学生が自分の判断で好きなように受講すればよい）と、授業担当者は考えている。しかしながら、学生から質問されることも多いので、担当者の考えるおすすめの学習方法を次のように示すこととする。受講者は、ここに示した方法にとらわれることなく、自分なりの学習方法を開発し、履践してほしい。



ふつうのノートではなく、ファイルと A4 判のルーズリーフを用意する。通常、1 回分の講義の内容は、レジュメの余白に書き込みをするだけでおさまるようなものではなかろう。そこで、レジュメに線引きをしたり書き込みをしたりするほかに、ルーズリーフに講義内容をメモし、それをレジュメとともにファイルにまとめる。そのほかに、講義に関係すると自分が考えた新聞記事などのコピーやウェブサイトをプリントアウトしたのも、合わせてファイルに挟んでおけば、自分だけの講義ノートが完成する。

○ 授業担当者へのアクセスについて

授業担当者の研究室は、本館 8 階 1810 号室である。

E メールアドレスは、yanase.noboru@nihon-u.ac.jp である。メールを送る際には、文中に、氏名・学籍番号と、何曜日・何時限の講義を受講しているのかを必ず明記する。できる限り通常のパソコンのメールアドレスから送信されたい(受信できないおそれがあるため、携帯電話のメールアドレスからの送信は、特段の事情がある場合を除き、避けられたい)。

講義の内容に関する質問や学生生活上の相談については、講義の前後において対応する。他の用務のため中止することもあるため、確実に時間を確保したい場合には、eメールで事前に連絡をとることをすすめる。



○ 参考書について

次に挙げるのは、標準的な憲法解釈論を学ぶにあたって役立つであろう参考書として、授業担当者が推奨できるものである。必要に応じて参照することを薦める。図書館などで、実際に手に取ってみて、読みやすいものを 1 冊手もとに置き、通読してほしい。

基本書・体系書

- ・ 芦部信喜 (高橋和之補訂) 『憲法 [第 7 版]』 (岩波書店、2019 年)
- ・ 佐藤幸治 『日本国憲法論』 (成文堂、2011 年)
- ・ 高橋和之 『立憲主義と日本国憲法 [第 5 版]』 (有斐閣、2020 年)
- ・ 野中俊彦・中村睦男・高橋和之・高見勝利 『憲法 I・II [第 5 版]』 (有斐閣、2012 年)

注釈書 (コンメンタール) 条文ごとに注釈が付されているもの

- ・ 木下智史・只野雅人編 『新・コンメンタール憲法 [第 2 版]』 (日本評論社、2019 年)

初学者が手もとに置くようなものではないが、信用できる注釈書として、樋口陽一・佐藤幸治・中村睦男・浦部法穂 『憲法 I・II・III・IV』 (青林書院、1994 年・1997 年・1998 年・2004 年) がある。また、注釈書と判例集の中間的な存在として、今井功・戸松秀典編 『論点体系 判例憲法 1・2・3』 (第一法規、2013 年) は推奨できる。